

神戸港からのたより

港 の 風

MINATO

NO

KAZE

PORT OF KOBE

vol. **57**

2024

夏号



特集

神戸港のモダン建築

港の風

神戸港からのたより

Vol. 57

2024年夏号

CONTENTS

- 01 はるかが行く 神戸みなとさんぽ 05
「ポートターミナルにある巨大リンゴ編」
- 03 特集
神戸港のモダン建築
- 06 船インフォメーション
- 10 港で働く人
新丸菱海運株式会社
門間 祐也さん
金川造船株式会社
高部 弘樹さん
- 11 神戸港を行き交う船
起重機船 海翔
- 12 神戸海洋博物館・カワサキワールドだより
- 14 神戸港貿易統計データ
神戸税関こぼれ話
ノンアルコールビールの輸入について
- 16 神戸空港NEWS
- 17 It's NEW !
夜の神戸を楽しむ新スポット
神戸ポートタワーに行ってきました！
- 18 神戸港TOPICS
- 20 神戸港イベントNEWS
- 21 編集後記



2024.06.17 神戸港に初入港した日中国際フェリーの新造船
「鑑真号（19,901総トン）」



「港の風～神戸港からのたより」

編集・発行 一般財団法人 神戸観光局 港湾振興部
〒650-0042 神戸市中央区波止場町2番2号
電話：078 (327) 8981 FAX：078 (332) 4739
<https://www.kobe-meriken.or.jp/>

神戸港の モダン建築

見どころ解説

2023年秋、神戸に現存するモダン建築を一斉公開するイベント「神戸モダン建築祭」が開催されました。

建築を楽しみ、街の魅力を体感できる神戸では初めての試みが注目を集めました。同建築祭の実行委員も務める笠原一人氏に神戸港のモダン建築をご紹介します。

「街と人が育む、神戸のモダン建築の魅力」

神戸の街には、戦前に建てられた洋館や洋風住宅、戦後に安藤忠雄らによってデザインされた現代建築など、いわゆるモダン建築が数多く建っています。神戸は幾度も大きな災害に見舞われてきましたが、それでもなお、モダン建築の量と質は日本有数のものです。それは大きく3つのテーマで捉えることができるでしょう。

1つ目は「貿易港としての神戸」です。神戸は1920年には東京、大阪に次いで人口で第3位の都市にまで成長しました。その成長を支えた神戸港には、税関や貿易関係施設、倉庫、オフィスビルなど、様々な様式や最新の技術を取り入れた建物が建ち並び、旧居留地には戦前に建てられたオフィスビルが今も群をなしています。

2つ目は「住宅地としての神戸」です。神戸ではあちこちに洋館や洋風住宅が建ち、モダンな日常風景をつくっています。たとえば今も外国人が数多く暮らす北野町や塩屋には「異人館」が建ち並んでいます。須磨や摩耶山麓には神戸の企業の経営者が、そして御影や住吉には大阪の企業の経営者が大豪邸を構えました。

3つ目は「リゾート地としての神戸」です。日本における登山やゴルフの発祥地である六甲山には、ゴルフ場のクラブハウスやホテル、別荘、そしてケーブルカーやロープウェイの駅舎などが現存します。さらに六甲山を越えれば、全国に知られる有馬温泉があり、木造の旅館や別荘のモダン建築が現存しています。

このように神戸には、神戸港を中心に栄えた産業エリア、市民の豊かな居住地、そして娯楽の場という、生活に必要なすべての要素が、海と山に挟まれた細長い斜面地に展開し、そこに豊かな建築が現存しているのです。ここではそのうち「貿易港としての神戸」に絞り、主要な建物を紹介したいと思います。



新港貿易会館

1930年竣工。港湾関係業者の事務所を集約するオフィスビル「新港相互館」として建設されました。



三井倉庫新港事務所

1926年竣工。北側から見た外観。左右対称の構成やアーチ、三角屋根のモチーフを組み合わせた古典主義的なデザインが特徴です。



1970年神戸市生まれ。1998年京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。2010-11年オランダ・デルフト工科大学客員研究員。博士(学術)。一般社団法人リビングヘリテージデザイン理事。京都モダン建築祭実行委員長。神戸モダン建築祭実行委員。単著に『ダッチ・リノベーション』。共編著に『村野藤吾の住宅デザイン』、『村野藤吾のリノベーション』、『建築家浦辺鎮太郎の仕事』、『建築と都市の保存再生デザイン』ほか。

かさはら かずと
京都工芸繊維大学准教授 笠原 一人

貿易港としての神戸

神戸港が貿易港として発展したことで、神戸の街は一気に大都市として発展しました。その発展の契機となったのは、1910年代から20年代にかけて建設された新港の4つの突堤でしょう。この突堤には日本初のケーソン工法が用いられ、その上に鉄筋コンクリート造の建築が建設されました。建物が5階、6階と階層を

重ねて巨大化し、デザインも建物の機能に合わせて様式が選択され、また機能性や合理性を重視したモダニズムと呼ばれる最先端のデザインが採用されました。鉄筋コンクリート造の建築こそが、神戸の近代の発展を支えたと言っても過言ではありません。神戸港に建ち並ぶ鉄筋コンクリート造の建築は、今や神戸の街にとって貴重な歴史遺産なのです。

Q2上屋

神戸港は国際旅客にとって大きな役割を果たしました。当時横浜港が主にアメリカ航路、神戸港は主にヨーロッパ航路を担っていました。そのため、東京の人もヨーロッパへの留学や移住に際しては、神戸までやって来て、神戸港から旅立ったのです。その神戸港の国際旅客を支えたQ2上屋（きゅーつーうわや）と呼ばれる1932年竣工の鉄筋コンクリート造の建物が、新港第4突堤、ポートライナーのポートターミナル駅の直下に現存していることを知る方は、ほとんどいないかもしれません。

不思議な名前を持つ建物ですが、Q岸壁の第2番目に建っている上屋であることを意味しています。竣工当時は神戸税関の管轄で第20号上屋と呼ばれ、建物の設計は神戸税関（1927年）と同じ大蔵省営繕管財局神戸出張所が担当しました。

これは東西約33mの奥行に南北約185mの幅を持つ細長い建物で、国際旅客船と旅客鉄道のターミナルという、2つの機能を兼ねた駅舎でした。ここから「ポート・トレイン」と呼ばれる特急列車が、京都まで旅客を運んでいました。横浜にも同様の旅客船と鉄道を接続する駅舎がありましたが、現存しません。

建物の1階の大部分は荷物置き場や物流倉庫として使われていました。2階の海側には客船の乗船デッキが、陸側の1階に鉄道のプラットフォームが設けられ、どちらにも奥行き約5mの片持ち梁で支えられた長い屋根が架けられて、現在も建物に強い水平性を与えています。

一方建物の中央部には、垂直線と水平線を組み合わせ、丸窓を備えた、アール・デコ風のデザインをまとった3階建ての建物が建っています。当時は1階に受付や事務室、2階に待合室、喫茶室、貴賓室、3階に事務室や宿直室などが設けられていました。



1階の受付窓口。角が丸くデザインされ、布目タイルが凹凸を付けて貼られています。窓の格子もアール・デコ風です。



北西側から建物上部を見る。建物の塗装は変更されていますが、建物の骨格と輪郭は竣工当時の姿のまま現存しています。



西側から建物中央部を見る。垂直線と水平線を構成し丸窓を配したアール・デコ風のデザインです。

1階には玄関の扉や、布目タイルが貼られた曲面の壁が印象的な受付窓口、上階への階段の壁面などに、アール・デコ調のデザインがそのまま残されていて、それを見ると往時にタイムスリップしたかのような気分になります。

現在は神戸市が所有、管理し、1階の大部分は民間に貸し出されて倉庫として、屋上は国際旅客船の送迎デッキとして活用されています。今後、より建物の歴史や魅力を活かした活用がされれば、神戸の文化や観光の目玉となるに違いありません。



2階に上がる南側の階段。北側にも左右反転した同じ階段があります。1階の鉄道駅のプラットフォームと2階の乗船デッキを繋いでいます。

三井倉庫 小野浜事務所

神戸港の歴史を物語る建築として欠かせないのが、倉庫です。港の輸送の中心を担うのは旅客ではなく圧倒的に物流であり、その物流の拠点となるのが倉庫ですから、倉庫はむしろ港の主役だと言ってよいでしょう。

1910年代から20年代に建設された新港の4つの突堤付近には、三菱倉庫(1925年)や住友倉庫(1926年／現存せず)、川西倉庫(1925年／現存せず)などが次々と建てられました。ここでは構造家の内藤多仲が設計に関与した、三井倉庫(旧東神倉庫)新港事務所(1926年)と同小野浜事務所(1934年)を紹介します。

2つの三井倉庫はいずれも効率的に物流を制御できるクレーンやエレベーター、シューターなどを備えています。先に建てられた新港事務所は三角形の屋根やアーチ窓を並べた古典主義建築のような格式ある姿を見せており、小野浜事務所はモダニズムに近い明快さを見せています。後者の屋上に設けられた展望室からの神戸港の眺めは素晴らしく、柱にはアール・デコ風の装飾が施されていて魅力的です。



南西側から眺めた外観。屋上の中央に船の航行を確認するための展望室が載っています。角を丸めてガラスを入れた様子は船の艦橋に似ています。



建物最上階の展望室の内部。3方向に廻され窓から神戸港を見渡すことができます。柱上部や天井の梁にはアール・デコ風の装飾が施されています。

KIITO

明治の開国以来、昭和初期までの間、日本の輸出産業を支えていたのは生糸、すなわち絹糸でした。横浜港と並んでその窓口となった神戸港は、1920年代から日本の中心を担うようになります。

そんな状況下で建設されたのが、生糸の輸出前の品質検査を行う生糸検査所です。1927年に神戸市立生糸検査所(旧館)が竣工し、1932年に東側に国立生糸検査所(新館)が増築されました。2012年からKIITOとして活用されています。

旧神戸市立生糸検査所は、かつて神戸市営繕課課長を務めた建築家清水栄二が設計しました。垂直線を強調するゴシック様式を基調としながら、表現主義的な新しいデザインでまとめられています。

一方、増築された旧国立生糸検査所の建物は、かつて兵庫県営繕課課長を務めた置塩章の設計です。こちらも置塩が得意としたゴシック様式でまとめられていますが、清水のものよりは少し古風なデザインです。北側の職員専用入口の床のタイルや階段も見どころです。



旧神戸市立生糸検査所の建物を西側から見る。垂直線が幾重にも重ねられたゴシック様式をモダンにしたデザインです。



旧国立生糸検査所の建物を南東側から見る。こちらも垂直線を強調したゴシック様式に基づいていますが、やや古風なデザインです。

神戸税関

貿易港にとって欠かせないのが税関です。人流と物流の出入国を管理し、関税の手続きをするのですから、国の顔となる施設だと言ってよいでしょう。

大きな時計台が目を引く神戸税関は、第2代目の建物として1927年に竣工しました。設計者は、Q2上屋（1932年）と同じ大蔵省営繕管財局神戸出張所でした。

国の施設だけにルネサンス様式を基調とした格式あるものとなっていますが、細部の装飾は1910年代から20年代にかけて全国で流行した、幾何学形態を多用するセセッション風のもので、つまり格式の中に、新しい要素が取り入れられているのです。玄関ホールには大きな吹き抜け、2階にはかつての貴賓室が残されていて、いずれもセセッション風の装飾で統一されています。

旧館の西側には、日建設計の設計による新館が1999年に竣工しました。この屋上では、神戸港を見渡す絶景が広がります。新旧の2つの建物がともに、今なお神戸港のランドマークとしての役割を果たしているのです。



南東側から見る外観。全体はルネサンス様式の構成ですが、細部はセセッション風の装飾が施されています。



玄関ホールの吹き抜け空間を下から見上げる。中央に見えるのは3階の天井。手摺子や柱頭飾りもセセッション風のデザインです。

商工貿易センタービル

神戸港は戦後も発展を続け、1970年代にはコンテナ取扱量がニューヨーク港やロッテルダム港と並ぶ、世界有数の国際貿易港となりました。

そんな中で建設されたのが、商工貿易センタービルです。日建設計の設計による26階建てのこのビルは、1969年の竣工時、東京の霞が関ビルディングに次いで日本で2番目に竣工した高層ビルでした。

建物は、敷地に対して45度傾けて配置されているため、常に建物の2面が港に向いた見晴らしのよさが特徴です。そのため外構には45度傾いた三角形の輪郭を持つ広場や階段が配置されて、随分変化のある空間となっていることにも注目してください。

手摺の上部は斜め45度に折り曲げられ、入口のドアハンドルや階数表示板が45度傾けて設置されているなど、随所に斜めのデザインが取り入れられています。敷地の北側に建つ展示場のサンボーホールにも梁や柱に斜めのデザインが用いられています。遠方から眺めているよりも、意外に豊かなデザインであることに気付くことでしょう。



1階ホールを見る。屋内にも随所に45度斜めのデザインが見られます。天井も竣工当時のまま残されています。



北西側から見上げる。手前の展示場「サンボーホール」に対して45度角度を振りながら高層ビルが配置されています。